

大分県日田市

記憶の共有と地域の持続—日田市研究拠点視察報告

安 斎 聡 子*

背景

日田と聞いて何を思い描くだろうか。重要伝統的建造物群保存地区の豆田町の街並み、ユネスコ無形文化遺産として登録された日田祇園、天領日田おひなまつりや温泉、三隈川の鶏飼といった観光資源、日田杉。工芸に詳しい人なら、一子相伝でつくられている小鹿田焼が浮かぶかもしれない。

本学部では、学部開設準備段階より交流のあった日田市を研究拠点の一つとして活動することを想定しており、2020年2月、その視察として同市を訪問した。その視察先についての報告を、記憶の共有と地域の持続という観点からまとめてみたい。

多層かつ多相的な地域課題と人々の活動

「背景」で触れた日田のイメージは、おそらくやや一面的な日田像といえるだろう。水郷・日田は、水害の多い土地でもある。令和2年7月豪雨の被害が記憶に新しいところだが、3年前の平成29年7月九州北部豪雨、その5年前の平成24年7月九州北部豪雨でも、日田市では大規模な河川の氾濫等が起きている。

今回訪問した小野公民館では、石井幹夫氏よりまちづくりグループ・すずれ元気村でのコミュニティカフェの活動について、NPOリエラの松永謙矢氏より、平成29年7月九州北部豪雨の復興支援、コミュニティ再建支援の取り組み等をうかがった。石井氏からは移住者としての視点、そして平成29年7月九州北部豪雨の

被災者として、さらにまちづくりグループのメンバーとしての視点から具体的なお話を伺うことができた。地域おこし協力隊でもあるNPOリエラの松永氏もまた、移入者である。東日本大震災で復旧・復興支援の経験を積んだ松永氏は、そのノウハウを生かしてコミュニティ再建・地域振興への支援に取り組んでいる。

全国の多くの市町村と変わらず日田市も、人口減少、少子高齢化を課題とする。2000年には77,369人だった人口は、2015年には66,523人に減少、2040年には49,136人となる予測が出ている。高齢化率は2000年には23.7パーセント（全国平均17.3パーセント）、2015年には32.7パーセント（全国平均26.6パーセント）と上昇している（日田市資料による）。

「羽田多目的交流館せんだん」は旧羽田小学校の木造校舎をリノベーションし、地域の人々と利用者の交流を目的に2012年にオープンした施設である。連絡協議会会長の後藤健一氏の案内により、交流館立ち上げの経緯、施設の構成、交流館を拠点とした地域と利用者の交流の実態などをお聞きした。建物内の随所に小学校の面影を残し、校庭には旧羽田小学校のシンボル・センダンの木が立っている。この小学校に通った経験のないわたしたちにさえ、懐かしい心持ちを抱かせる。小学校としての機能は失われても、かつての校舎・校庭が残っていることの、コミュニティに与える影響の大きさが想像される。

天瀬公民館もまた、活発な社会教育活動が行われている拠点の一つであった。青少年学習、成人学習、高齢者学習、社会人権教育、家庭教育学習、環境学習、自主学習教室 公民館まつ

*青山学院大学

り、まちづくり等に分かれて実施されている事業は、いずれも地域の人々の日々の充実と地域づくりが意図された内容である。本館・分館を合わせ、2019年度は総計1,223回、延11,802人がその事業に参加しており、公民館事業を通じて、さまざまな年齢層の地域の人々が、地域づくりに加わっているといえる。

縮小する人口とまちの機能に対し、人々は住民自治の力を発揮しようとしている。そうした地域の一つが中津江地区である。2005年、日田市と日田郡前津江村、中津江村、上津江村、大山町、天瀬町の2町3村が合併、新たな日田市が誕生した。古くは鯛生金山、近年では2002 FIFAワールドカップにおけるカメルーン共和国の事前キャンプ地としても知られた中津江村は、この編入合併により村としての歴史に幕を降ろした。合併後の中津江では、各自治会長・各種団体役員等を中心に「中津江振興協議会」を組織し、地域振興を目指してきたが、2018年10月「住民自治」の機能を加えて再編、「住民自治組織 中津江振興協議会」通称「中津江むらづくり役場」としての活動を開始した。「足りないものは自分たちで補いながら、欲しいものは自分たちでつくっていく、なんでも相談できる場所」を基本目標として掲げ、新たな事業として住民の依り所、つながりづくりの場としての「月いちバザール」の開催や、自主防災組織の活性化、生活道路点検、などが実施されている。

それぞれの場所で、地域の人々の活動が重ねられている。こうした着実な活動には官民を問わず、キーパーソンがいることにも気づかされる。平成の大合併は自然村の範囲を大きく超える枠組みを生み出した。しかし、地域課題への取り組みは、大きな枠組みである行政のみならず、その地に生きる人々、その地に関わる人々

によって担われている。

共に過ごした記憶が人々をつなぐ

地域は何をもって地域となりえるのか。「地域」という言葉から何をイメージするかは人により異なるだろう。しかし、そこには、共に活動した記憶が人々をつなぐという共通点がある。血のつながりのみで家族がつくられるわけではない。共に過ごした温かで確かな記憶が家族として個々を結びつける。同様に、同じ土地に生まれたことだけでは人々の紐帯は生まれない。共に同じ学校に通い、夏祭りを楽しみ、地域ぐるみの運動会で汗を流すといった、共通する体験の記憶が人々をつなぐ。共通する記憶は、他の誰でもない「わたし」をつくり、「わたしたち」をつくる。それは、必ずしも同時代の学校、同日同所の夏祭り、運動会を意味しない。活動が開かれている限りにおいて、元からその土地にいる人、移住等で遅れてやってきた人の別も問わない。一人一人にとってのかけがえのない地域は、所与のものではなく獲得されるものである。その意味において、地域の活動が人々に開かれていること、活動が維持されていることの重大さに気づかされる。

訪問から5ヶ月後の7月、記録的な大雨に見舞われ玖珠川、三隈川が氾濫、再びこの地に甚大な被害をもたらした（令和2年7月豪雨）。自然災害の増加と少子高齢化が進む状況は、全国各地の地域課題と重なり合う、わたしたちの「現在地」である。同日同所の体験の記憶を共有していなくとも、人と人がつながりを築けるように、わたしたちがこの地とともに学べることは多い。

最後に、貴重な視察の機会を与えてくださった日田市関係各位、地域の皆様に、この場を借りて心より御礼申し上げたい。



小野公民館での視察



羽田多目的交流館（左：旧羽田小学校の教室を転用した活動室 右：校庭に立つセンダンの木）



天瀬公民館



住民自治組織 中津江振興協議会での視察